

令和7年(2025)2月9日

金棒池古墳発掘調査 現地説明会資料

神戸女子大学考古学研究室

調査の概要

遺跡名 金棒池古墳 所在地 神戸市西区神出町金棒池1-1
調査主体 神戸女子大学考古学研究室 連携協力 神戸市文化スポーツ局文化財課
調査期間 2025年2月2日～11日

調査の経緯と目的

神戸女子大学考古学研究室では、神戸市文化スポーツ局文化財課との調査研究連携協定のもと、神戸市西区金棒池古墳の発掘調査を実施しました。

有力者の墓を大きく作り、葬ることを社会的に承認していた3世紀中頃から6世紀までのおおよそ350年間を、古墳時代と呼んでいます。この時代、北海道・東北北部と南西諸島を除く日本列島の広い範囲に、約16万基の古墳が作られました。特に、金棒池古墳のような形の古墳を**前方後円墳**と言います。16万基のうち、前方後円墳は4700基ほどしかありません。

金棒池古墳は、古墳時代350年間のなかでは新しい**古墳時代後期(6世紀)**に造られた古墳で、神戸市域では最後を飾る前方後円墳の1つと考えられています。しかしながら、それ以上はまだよくわかっていません。そこで神戸女子大学考古学研究室では、まず昨年度、古墳の測量調査を実施しました。結果、精細な測量図は完成したものの、損傷や浸食は予想以上に甚だしく、古墳が本来どのような形をしていて、どの程度の規模があったかを明らかにすることができませんでした。

古墳の形や規模は、古墳時代の政治秩序を解き明かすうえで重要な手掛かりの1つです。しかし測量調査の結果ではあと一步そこに迫ることができません。そこで私たちは、古墳の墳端を把握することを目的とする発掘調査を行うこととしました。この調査はまた、金棒池古墳を将来に受け継ぐ適切な方針を神戸市当局が定められるよう、損傷の度合いに関する情報を提供することも目標としています。

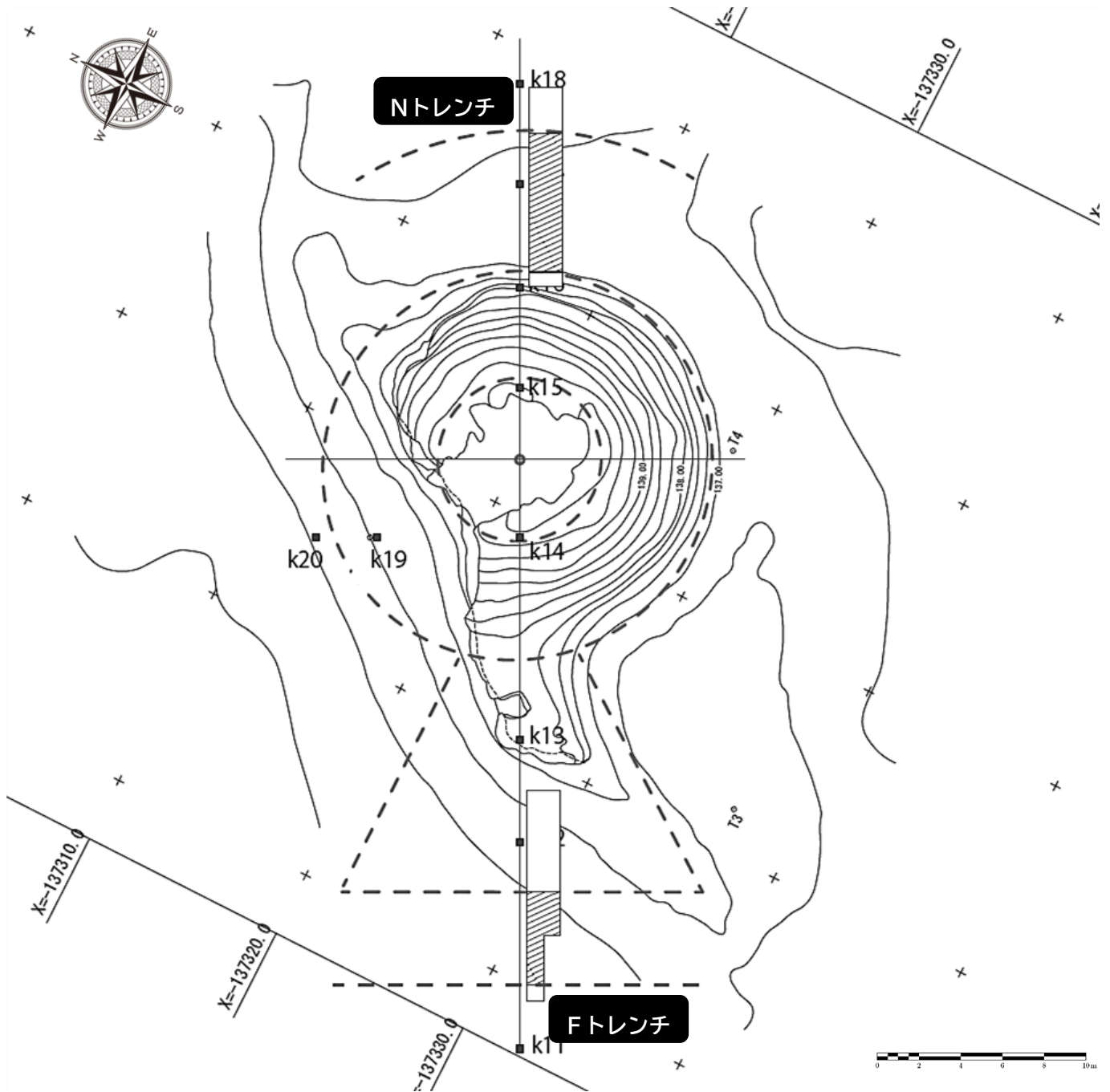
発掘調査の成果

【Fトレンチ(西側)の成果】前方部がどこまであったのかを明らかにするため、幅1.5m×長さ12.5mのトレンチを設定しました。結果、前方部は現在残っている部分より本来さらに大きかったこと、そして元々の地表面の上に質の違う複数の土を盛って造ったことがわかりました。また、墳丘を囲む周溝が検出されました。周溝は5mほどの幅を持ち、墳丘との際には墳丘が崩れないようにしっかりと固めた盛土がみとめられます。

このトレンチの最大の成果は、前方部の墳端が明らかになったことです。これにより**金棒池古墳の墳長は約30m**と確定しました。盛土の様子から**墳丘の構築過程**を把握することもできました。

【Nトレンチ(東側)の成果】後円部の墳端をおさえるため、幅0.6m×長さ10mのトレンチを設定しました。結果、Nトレンチでも古墳营造時の地表面と盛土、そして墳丘を囲む周溝が検出されています。周溝の幅は6mほどで、Fトレンチで検出されたものと同種の粘質土で埋まっています。中央は現代の攪乱を受けているものの、墳丘寄りの箇所からは古墳時代の須恵器が出土しました。

須恵器が溝の中から出土したことが、このトレンチの最大の成果です。これにより墳丘の東西で検出された**掘り込みの痕跡**を、古墳にともなう周溝と断定できるようになりました。



こちらをご覧ください

まもなく第3弾が配信の予定です。



金棒池 で検索！

検索



金棒池古墳の発掘調査は、2024年度大学発アーバンイノベーション神戸「神戸最後の前方後円墳」の実態解明と持続的保全・活用方法の構築をめざした総合的研究の助成を受けて実施しています。